

# 『実例詳解古典文法総覧』補遺稿

連載第 32 回 第 8.4.1.3 節～第 8.4.6 節

2019 年 4 月 15 日

小 田 勝

235-237 頁「8.4.1.3 まほし・たし」の節の後に、節を新設する。

---

## 8.4.1.4 ほる(新設)

願望の意を表す動詞に「ほる」(四段)があり、

(1) 我がほりし [和我保里之] 雨は降り来ぬ (万 4124)

上代では、「…まくほる」の形で「…したい」の意を表した。

(2) 馬並めてみ吉野川を見まくほりうち越え来てそ滝に遊びつる (万 1104)

(3) 月夜には門に出で立ちて夕占問ひ足占をそせし行かまくほり (万 736)  
「ほる」に「す」が付いた再サ変動詞(→連載第 4 回 § 2.9)「ほりす」も用いられる。

(4) 古の七の賢しき人たちもほりせしものは酒にしあるらし (万 340)

「ほりす」は後世「ほす」と転じ、「…とほす」の形で願望表現を表した。

(5) 年来の宿望をとげんとほすのほか他事なし。(平家 11・腰越)

---

237 頁「8.4.2 打ち消された事態に対する願望表現」。「まうし」に終止形はないといわれるが(例えば『日本国語大辞典 [第 2 版]』の「まうし」の語誌(3)に「終止形の例は見当たらない。」とある)、次のような例があるのであげておく。

・おとろへ姿、いと見え奉りまうし。(唐物語 15)

239 頁◆の「ま惜し」の例を追加する。

・初雪の踏まま惜しさに道すがら我より先の跡を行くかな(為忠家後度百首)

次例の「動詞+いとほし」も「…したくない」の意であるが、これは歌題(白居易「上陽白髮人」の一節)中の「いとほし」の翻訳であり、恐らく自然な日本語ではないであろう。

・物思ふ時は何せん鶯のいとほしき春にもあるかな(大弐高遠集)〈詞書「宮鶯百轉愁  
いとほし」〉

239 頁「8.4.3 希求表現」。①の「…なむ」の例を追加する。

- ・いつしか梅咲かなむ。(更級)

すでに述べた(補遺稿第31回)「あらばや」と同様、「あらまほし」「ありたし」も、その存在への希求(テホシイ)の意を表す。

240 頁「8.4.3.1 なむ」。次例は断定辞「なり」に付いた例である。

- ・あととめて古きをしたふ世ならなむ今もあり経ば昔なるべし(新勅撰 1153)

240 頁「8.4.3.2 もがな」。「実現不可能な事物や状態を希求する意を表す」と書いたが、実現不可能とまではいえない事物を希求する「もが」の例もないではない。

- ・つともがと[欲得褻登](=土産ガ欲シイト)乞はば取らせむ貝拾ふ我を濡らすな沖つ白波(万 1196)

241 頁用例(10)は、「君がみ舟の梶柄でありたい」ということで、「にもが」の「に」は断定の助動詞「なり」の連用形とすべきであった。類例、

- ・伊勢の海の沖つ白波[ガ]花にもが包みて妹が家づとにせむ(万 306)

「格助詞「に」+もが」と考えられるものとして、次例をあげておく。

- ・ほととぎす汝が初声は我にもが[於吾欲得]五月の玉に交へて貫かむ(万 1939)〈新大系訳「お前の初声は是非私に貫きたい。」〉

- ・我がやどの尾花が上の白露を消たずて玉に貫くものにもが[尔毛我](万 1572)

次例は、指示語に付いた例である。

- ・斯もが(=アアナレバヨイ)と我が見し子ら斯くもが(=コウナレバヨイ)と吾が見し子に(記歌謡 42)

242 頁用例(20)について、「名詞+ともがな」の例としては次例に差し替え、

- ・いづくをも夜がるることのわりなきに二つに分くる我が身ともがな(詞花 245)〈詞書「等恋兩人といふことを詠める」〉

用例(20)は「AをBともがな」の句型の例とする。「AをBともがな」は、「AがBであつたらなあ」の意を表す。

- ・今日を限りの命ともがな(百 54) ←用例(20)
- ・数知らず重なる年を鶯の声する方の若菜ともがな(後拾遺 37)
- ・ありふるもうき世なりうけり長からぬ人の心を命ともがな(金葉 690)

上記第3例は、「長からぬ人の心」が「(私の)命」であつたらなあ(=私の命が短くあつてほしい)の意である。

用例(23)は、三巻本は「さらん者がな。使はんとこそおぼゆれ」(281)に作るが、

これを「さらん者がな使はん」と読むなら、§13.1.9の例となる。用例(27)の類例を追加する。次例は、「何をしたらよかろう」の意である。

- ・この入道とかや来たり。大方、「何とがな」ともてなすに（とはずがたり）  
この節の後に、節を新設する。

---

### 8.4.3.3 めかな(新設)

「…めかな」（「め」は助動詞「ず」の連体形、「かな」は終助詞）は「…ないことだなあ」の意から、希求表現として用いられる。

- (1) 出でて行かむ人をとどめむよしなきに隣の方に鼻もひめかな（古今1043）
- (2) 五月雨の夜は暗くとも郭公さやかにだにも鳴きて来こめかな（躬恒集）

---

242 頁「8.4.4 打ち消された事態に対する希求表現」。次のような「ず」の命令形は、打ち消された事態に対する希求表現を表す。

- ・あらせばやと思ふ人のみ亡<sup>う</sup>せはててあらざれかしと思ふ人のみ（拾玉集）

243 頁「8.4.5 上代の希求表現」の用例(2)について、「も」のない「…めかも」の例もある。

- ・かくしつづ我が待つしほしあらめかも世の人皆の常にあらなくに（万2585）

244 頁「8.4.6 希望表現の違例」。すでに述べたように（補遺稿第31回）、用例(1)は§8.4.1.2に移される。用例(3)(4)の類例をあげておく。

- ・誰もさぞ宿から（=私ノ住ム家ノセイデ）[曇ル]と見し月なれど心曇らぬ人にとはなむ（隆信集）
- ・織女に問ひて知らなむ秋の野の花の錦をいくよ織りつと（元輔集）
- ・えびすこそ物のあはれは知ると聞けいざみちのく陸奥の奥へ行かなん（拾玉集）

これで「第8章 当為・意志・勧誘・命令」の補遺稿を終え、次回からは「第9章 疑問表現」に入ることにする。